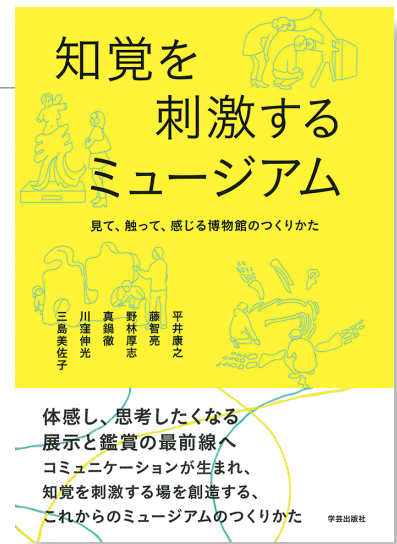


知覚を刺激するミュージアム

—見て、触って、感じる博物館のつくりかた

平井康之・藤智亮・野林厚志・
真鍋徹・川窪伸光・三島美佐子著
学芸出版社 / 2014年 / 本体 2,300円 + 税



ユニバーサルミュージアムとは誰もがアクセスでき、楽しむことができる博物館のことである。たとえば触って鑑賞するハンズオンは、ユニバーサルミュージアムの取組みの一つである。ハンズオンは、もともと視覚障がい者のための情報保障と考えられていたが、今では誰でもが楽しめる触覚を介した新しい鑑賞方法として期待されている。我々は視覚による鑑賞を当たり前としているせいか、ハンズオンのような視覚以外の鑑賞の研究は、まだ手探り状態である。触覚はおそらくまだ全体像が見えない多様な鑑賞方法の一つに過ぎないだろう。その先には聴覚などを含めたさらに広い知覚を活かした新たな鑑賞の可能性があるのでないだろうか。また鑑賞や展示に関わる課題は、博物館側の考え方にも影響を受けている。鑑賞者側と研究者ら博物館側のコミュニケーションが、展示を通じて自然と生まれるにはどうすればよいのだろうか。

本書は、そのようなより広い視点から従来の鑑賞のあり方を見直すもので、日本学術振興会の基盤研究Cの成果をもとにしている（日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究C（2010～2012年度、課題番号22601006、研究代表者・平井康之）。この研究の目的は、総合的で実践的かつ持続可能なユニバーサルミュージアムのモデルを示すことにあった。4人の異なる専門性や立場を持ったメンバーがディスカッションを繰り返し、それを通じて得られた知見を共有し、それぞれの研究成果を持ち寄った。並行して、国立民族学博物館文化資源研究センター事業（2012年度）及び文化資源プロジェクト「博物館展示空間へのアクセスに関する実証的研究」（2013年度）において、視覚に障がいのある人とともに展示鑑賞の課題を発見するワークショップを行い、知覚に関する洞察を深めた。さらに国立民族学博物館の機関研究「ケアと育みの人類学」の一環として国際シンポジウム「インクルーシブデザインとは何か—ケアと育みの環境を目指して—」（2012年3月）を開催した。これらの研究成果をもとに、本書が生まれた。

本書では知覚による鑑賞を「視覚や聴覚などの各種の感覚に対し、多角的・複合的に働きかける鑑賞」と定義し、広く知覚に訴える総合的な視点からの考察を目的としている。当然、「五感という表現ではだめなのか」という質問が飛んできそうである。もちろん五感には知覚の中にも含まれているが、ここであえて「五感」ではなく「知覚」としたのは意味がある。それは知覚が、「五感」のような感覚機能ではなく、過去の学習や経験を含めた総合的な体験だからである。知覚は、

人間が外部からの刺激によって受けとることのできる感覚とそれによって呼び起こされる記憶と新たな想像とが結びついて得られる現象である。それゆえ五感だけでは不十分なのである。

本書は、1章と2章が来館者側、3章から5章が博物館側から見た知覚鑑賞のあり方という構成になっている。まず1章では平井が、本書の基本となる知覚鑑賞への多様なアプローチについて紹介している。そこには「ヨーロッパのユニバーサルデザイン」とも呼ばれる、ユーザーとともにデザインする「インクルーシブデザイン」の視点が根底にある。続いて2章では藤が、ITエンジニアとして、ユーザー参加型であるインクルーシブデザイン・ワークショップで得られた多様な来館者の気づきをデータベース化した事例を紹介する。

3章以降の3つの記述は、人文社会学系、自然科学系、そして大学博物館という異なる館種の博物館における具体例から構成されている。3章では野林が、視点を変えて、情報の伝達手法という観点から考えた博物館展示の知見を紹介している。これは国立民族学博物館での人類学分野で培われてきた文化社会の理解、すなわち自分とは異なる文化や社会に住む人々をどう理解するかという長年の課題から見いだされてきたものである。4章では真鍋・川窪が、人間の標準的な視力では認識しづらい自然事象の可視化について言及し、北九州市立自然史・歴史博物館での自然現象の映像展示を紹介している。最後に5章では三島が、九州大学総合研究博物館におけるアーティストとのコラボレーション展示の事例を軸に、感性的な空間を用いた取組みなどを紹介し、博物館に存在する、言葉では明確に説明しづらい知覚的側面について考察している。

これら5つの章を通じた様々な立場からの知覚鑑賞への問いかけは、最初の挑戦であるがゆえに体系的ではない点もあるが、新たな考察に富み、好奇心を喚起する内容となっている。本書が、次世代のミュージアムを考えるきっかけとして活用されることを期待している。

文 平井康之

九州大学大学院芸術工学研究院デザインストラテジー部門准教授。専門は生活空間デザイン、インクルーシブデザイン、デザイン思考。ソーシャルデザインの視点からデザイン研究を行っている。2010年より国立民族学博物館客員教員も務めている。共編著に『インクルーシブデザイン・ハンドブック』（たんぼぼの家2006年）、『インクルーシブデザイン』（学芸出版2014年）など。